李光洙の初期独立運動の意味
――1918～1919年の活動を中心に――

The meaning of Lee Kwangsoo's early independence movement
――Focusing on activities from 1918 to 1919――

李　侑珍
LEE Yujin

李光洙の初期独立運動の意味
――1918～1919年の活動を中心に――

The meaning of Lee Kwangsoo's early independence movement
――Focusing on activities from 1918 to 1919――

李　侑珍
LEE Yujin

要旨：李光洙の許英粛との北京への逃避から上海への亡命までの行跡は資料の限界もあって、様々な解釈があるが、李光洙の第２次東京留学時代の行跡と許英粛と交わした手紙を通じて、北京に行った顛末、北京からソウルに帰国した後の行跡、東京で担った『２・８独立宣言書』執筆と「３・１独立運動」の準備、上海への亡命が李光洙個人の判断によることではなく、第２次東京留学時代から築いてきた活動と信頼が第１次世界大戦の終戦がもたらした「独立の好機」という希望と相俟って「新亜同盟党」、「朝鮮青年独立団」、「新韓青年党」の計画と指示による活躍であったことが推定できた。

このような行跡の一連として、李光洙は上海でも「新韓青年党」の党員と行動をともにし、「新韓青年党」発行の『独立新報』の刊行を手伝い、「新韓青年党趣旨書」、『独立新聞』の「創刊辞」、『独立新聞』の創刊号に「宣伝改造」を載せ「改造論」・「宣伝の重要性」を力説したが、このような活動は「世界改造」の情勢に合わせた当時李光洙が選択した独立運動の方針として、李光洙が続けて主張してきた「準備論」ともつながるといえる。

キーワード：李光洙、許英粛、新韓青年党、２・８独立宣言書、独立新聞、宣伝改造

１．はじめに

第２次東京留学時代の1918年、李光洙は恋愛中だった許英粛と２人で北京へ逃避し[1]、逃避中北京で第１次世界大戦の終戦を聞き、北京での生活を終え急遽帰国することとなる。ソウルに着

いた後は玄相允と会って国内の情勢について相談した後、日本に渡り『２・８独立宣言書』を執筆する。彼が突然北京での生活を終えて日本に帰国したのは、今こそ独立できる絶好の機会だという判断もあり、志士としての使命があったためであろう。李光洙は日本で『２・８独立宣言書』を執筆した後、朝鮮の独立宣言を海外メディアに知らせる任務のため上海に行くことになり、亡命生活が始まる。

このように、李光洙の第２次東京留学時代から上海へ亡命するまでの行跡をいう際には、必ず許英粛と北京へ逃避したことも言及するようになるが、北京からソウル、東京、上海までの行跡が約４ヶ月の間に行われたことを考えると、どれほど緊迫に進行されたことだったのか窺うことができる。

このような多難な状況を表しているかのように、李光洙がこの時期に書いた文は少なく、後でもこの時期について言及した文は殆どないのが事実である。この時期に書いた文は『独立新聞』に主筆として書いた記事と論説、そして李光洙が許英粛と交わした手紙が全部である。『独立新聞』に書いた記事と論説は『独立新聞』の主筆として公的な立場で書いたものとして、李光洙が上海でどのような認識を持ちながら独立運動をしたのか窺うことができ、李光洙と許英粛が交わした手紙は私的な資料として、２人の心境と状況を理解することができる資料として、李光洙の上海時代が分かる最も重要な資料であるといえる。

その後李光洙は回顧する文である「上海の二年間」（1932）で簡単に言及し、解放後に書いた自伝小説「私の告白」（1948）にて初めて北京から上海への亡命の行跡について具体的に述べている[2]。そのため、李光洙がなぜ北京に行き、なぜ北京から急遽帰国したのか、そして、帰国した後の行跡と、また上海へ亡命するまでの経緯については「私の告白」に依存して把握するしかなかった。しかし、最近は当時一緒に活躍した独立運動家も研究の範囲に入れ、より多角度で調べるほか、「国外抗日運動資料外務省記録」などの歴史的な資料を用いた分析も行い、限られた資料からの限界を乗り越え、事実に沿って再構成しようとする研究が行われている[3]。

しかし、当時は独立運動家には厳しい観察と弾圧があった時期であることを忘れてはいけない。書かれている資料もどこまで信用していいのか深く考えないといけない限界があり、回顧録なので記憶の正確さ、自己中心の思考などを考慮すれば[4]、資料だけに依存して判断できないことも事実である。李光洙のこの時期の行跡において同じ資料を用いながらも全く異なる解釈が行われることもこのような理由からであろう[5]。

そのため、本稿では李光洙がこの時期について言及した文を基に、当時一緒に活動した人々の回顧録や機密文書など歴史的な資料を用いて、李光洙の北京行きから上海亡命生活までの顛末を

もう一度追跡してみることにする。このような行跡を通じて李光洙が初期の独立運動についてどのような認識を持って参加し、この認識が上海の亡命活動までどのような関連性を持ちながら続いたのか探ってみることにする。このような認識は李光洙が上海で主力した『独立新聞』の論説にも読み取られると期待する。

以上、李光洙の北京から上海に渡る行跡を辿ることは、李光洙の初期の独立運動の活動全般を理解するとともに、上海から突然帰国した事件も含めた李光洙の独立運動に対する思想と活動を理解するに重要な役割を果たすと思われる。

２．なぜ北京へ行ったのか

李光洙と許英粛の中国への逃避計画は、李光洙と許英粛が交わした手紙を通じてその顛末が分かる。しかし、この顛末には３つの疑問がある。いつから逃避を考えたのか、そしてなぜ逃避の場所が中国だったのか、最後にこの逃避生活はなぜ２ヶ月で終わってしまったのかである。なぜなら、李光洙は北京に出発する前に「京城日報」と「毎日申報」の社長である阿部充家から奉天総領事及び、その他各所の領事に提出する紹介状をもらい、緊迫に実行された逃避にしては準備をしてから出発し、北京に着いた後も許英粛は母から２回にわたって送金をもらって家まで契約し、山本病院に出勤するなど[6]、突然の逃避、一時的な逃避とは思えない行動を見せたからである。

李光洙と許英粛が交わした手紙によると、李光洙は許英粛が東京女医専を卒業した後、1918年７月25日に朝鮮に帰国する２日前の手紙で、自分が学校を中退して許英粛と一緒に帰国するか、許英粛をつれて遠いところに逃げたい[7]と打ち明けている。やはり許英粛と別れることとなったため帰国させたくない、一緒に逃げたいという気持ちが生じたのは当然かも知れない。しかし、許英粛が帰国して約１ヶ月経った後、許英粛が京城で病院を開業する予定だと書いた手紙の返信に「英が京城で開業するつもりなら私は反対しません。すでに私の事情は変わったからです。」[8]（下線は筆者）と気持ちや覚悟が変わったことを書いている。

李光洙はなぜ約１ヶ月の間にこのように気持ちが変わり、変わった事情は何であろうか。その後、同年10月２日と13日の李光洙の手紙には「中国へ行きましょう」[9]、「私達２人で南支那の美しいところに行って教師でもやろう。２人で食べて生きることさえできればそれで充分ではないでしょうか」[10]とまた変わり、具体的な方案まで提案していることが分かる。

このように計画だけを立てていた北京への逃避が実行できるきっかけとなったのは、李光洙と許英粛の恋愛を反対していた許英粛の家で無理に結婚を準備し、許英粛がそれ以上家にはいられない緊迫な状況に置かれていたためである。李光洙はすぐソウルに向かうという手紙を送り[11]、1918年10月16日に東京を出発し、２人はついに11月18日に北京に到着し、約２ヶ月間滞在することとなった。

では、李光洙はなぜ約３ヶ月の間２回にわたって許英粛との未来の計画が変わっただろうか。これに関する手がかりを得るためには李光洙の第２次東京留学時代の行跡について詳しく探ってみる必要がある。

李光洙は第２次東京留学時代である早稲田大学在学中「朝鮮留学生学友会」、「朝鮮学会」、「朝鮮女子留学生親睦会」などの団体で活動し、「朝鮮留学生学友会」の機関誌である『学之光』に作品を載せながら1918年には編集者として活動した経歴がある。この時に一緒に活動した人々が「朝鮮留学生学友会」の任員でありながら会員だった張徳秀と玄相允だった。許英粛も1915年李光洙と初めて会った当時を「その時張徳秀さん、崔斗善さん、玄相允さん、そんな方達と何かの会であったが、私も参加して初めて彼と会いました」[12]と述懐している。許英粛が李光洙と一緒に覚えていた張徳秀、崔斗善、玄相允は同じ早稲田大学の学生であり、留学中に留学生会に参加しながら信頼を積んだ親友であった。李光洙が『学之光』に「共和国の滅亡」（1915）を発表した当時張徳秀が『学之光』の編集及び発行人であり、玄相允が印刷担当者であったことを考えると彼らの親しみは厚かったと考えられる。

さらに、張徳秀と玄相允は「在日朝鮮学友会」だけではなく、「新民会」が解散後各自に分散された独立運動を上海で統合・再編した秘密組織「同濟会」と、イギリス租界で結成した「新韓革命党」が若い世代の留学生と中国人を連帯して新しく組織した「新亜同濟会」の会員でもあった。

「新亜同濟会」は日本支部、北京支部を設け、日本支部を「新亜同盟党」とも称したが、張徳秀は「新亜同盟党」のリーダーであり、崔斗善、玄相允、崔八鎔、申翼熙なども「新亜同盟党」の盟員であった。彼らの戦略は日本の侵略を直視し、独立運動の舞台を中国に置きながら自ら軍事力を構築し、日・米と日・中の矛盾を攻撃するだけではなく、ロシア革命にも注目しながら解放の道を提示することであった。さらに、呂運亨も「同濟会」、「新亜同濟会」の理事として参加しながら1917年に上海へ移住し、中国の民族的な権威を結集させていた孫文と会うなど、活発な活動をしていたが、その頃早稲田大学を卒業した張徳秀が上海へ脱出して合流したため、「新亜同盟党」はもっと活発に活動をすることとなった[13]。

彼らは中国だけではなく世界情勢について水準高い分析力を持っていたが、張徳秀は上海で呂運亨、鮮于赫、金哲、趙素昂、趙東祜、韓鎭敎などと1918年夏以降国内外の情勢による独立運動の問題を討論するため毎週土曜日に定期的な集いをした[14]と述懐している。このような持続的な活動の結果として「新亜同盟党」よりもっと目的意識が明確な「新韓青年党」を結成することとなるが、「新韓青年党」の創党によって上海の独立運動の再編が行われていたといえる。

「新韓青年党」の創党背景については様々な説があるが[15]、韓国と中国の連帯組織である「新亜同盟党」を母体に、朝鮮人が主軸となって新しく民族独立を実行する目的で創党した党として、国際情勢の変化に対する情報を共有しながら今が「独立の好機」だという判断のもとで活動した組織であったということには異見がない。

11月11日第１次世界大戦の終戦、11月28日アメリカウィルソン大統領の特使クレインと呂運亨との会い、1919年１月18日に開幕するパリ講和会議などは「新韓青年党」の党員をもっと密集させ、推進させる原動力となったことも確かである。

1918年12月19日に朝鮮総督府警務総長の視察要求で尾行を担当した北京日本領事官密偵の報告によると「内地留学生中排日思想朝鮮人の首脳者李光洙、玄相允、鄭魯湜など数名が東京某所で密会し」、「講和会議に朝鮮人代表者を送ることを企画するが、留学生だけではなく、各方面と協力してアメリカ、西北間島、ロシア令及び、上海方面の同志と効果的な方法で連絡を取ろうとし、まず北京方面は東京の排日学生代表者として李光洙、上海方面は張徳秀、ロシア令方面は梁起鐸が各々代表者として参会するのである」[16]と報告されている。さらに、「代表者派遣に関する運動方法は今回北京密会で決意条件を整理した後、各地同志の協力を得て修行しようとする」[17]と分析し、報告している。

この報告書によると、1918年12月19日以前北京では世界情勢に合わせた朝鮮民族の独立運動の方向とパリ講和会議の代表派遣問題のための密会があったことが分かる。これを証明してくれる資料として、張徳秀の家でパリ講和会議に送る代表団を論議し、ウィルソン大統領に送る陳情書も書いたが、張徳秀が朝鮮語で作成した原稿を呂運亨が英文で翻訳した後にピーチ博士の校閲を経て、1918年11月28日呂運亨は「新韓青年党」の代表者として署名した２通の陳情書を完成した[18]という記録がある。さらに、金奎植はパリに出発する前である12月10日に天津にてハワイにいる友人朴容萬に手紙を送ったが、その手紙からは１月頃にはパリへ出発することとパリでの任務について詳しく書かれていたため[19]、12月10日以前にすでに具体的な計画が立てられていたことが分かる。

このような状況から、まだ北京密会がいつ、どこで行われていたのかは分からない。密会だっ

たため具体的な記録が残ってないためでもあり、張徳秀の家で行った論議が北京密会だったかも知れない。この時期に金奎植、李光洙、孫貞道など、すでに「新韓青年党」の党員が20～40名程度だった[20]という事実と、２通の陳情書を作成するにあたって具体的に役割分担が行われていた記録から、密会は必要だったし、実際に密会があったと推論できる。

以上の内容をまとめると、第１次世界大戦の終戦を前後にして「独立の好機」という世界情勢によって「新韓青年党」の党員を中心に活発に独立のための計画が推進されていたが、各地域に分散されていた党員の代表が北京で集まって密会をし、また各自担った地域に分散して宣伝と主導する計画を進行していたと推定できる。その際李光洙は北京代表としての資格として参加したかどうかまでは断定できないが、第２次東京留学時代に築いた親友関係と「学友会」、「朝鮮学会」などの活動から東京での情報交換と協議によって北京へ行くこととなり、北京からは密会で決められた計画を実行するために急遽東京に帰国することとなったと推定できる。

では、李光洙と許英粛が交わした手紙には中国行きの提案と北京に行った経緯についてどのように書かれているだろうか。

李光洙と許英粛は許英粛の家での結婚反対によって恋愛さえもできない状況となり、李光洙が逃避を提案し、逃避の計画は許英粛の家での他の人との結婚準備のため実行されることとなった。

しかし、具体的に「中国へ行きましょう」と提案した李光洙は「万一来年六月それとも七月に朝鮮で結婚することができるなら我慢するが、できないなら私は一日でも早く中国へ行くつもりです。そして、新しい生活の準備をします」[21]と数ヶ月以内に結婚ができるなら中国へ行かないが、結婚が延期になると中国へ一日も早く行って新しい人生を過ごすつもりだと覚悟を話している。さらに、「私は英に「中国へ行ってくれますか」とまた聞く必要もありません。ただ適当な時に「来てください」と話すのみです」[22]と許英粛の意思とは関係なく、すでに中国へ行くことに決めたことが分かる。来られる時に来るように頼むだけである。万一、李光洙が許英粛との逃避のために中国へ行こうとするなら、許英粛を朝鮮に置いたまま自分一人で行き、後で来られるなら来るようにいえるだろうか。状況に合わない行動である。

しかし、このような断固たる決心を見せている中国行きにもかかわらず、李光洙は非常に不安で、自信がない姿も見せている。「今度の中国行きは私にとっては最後に判別することです。万一失敗すれば私の人生は破滅です。私は英に私の全ての愛を捧げることもできず終わってしまいます」[23]と恋人との逃避旅行では考えられない自分の一生をかけた中国行きであることを打ち明けている。さらに、自分が今まで許英粛に積極的に逃避しようと提案できなかった理由について既婚者という条件のためではなく、「私が中国へ行こうとは言ったが、実は実力がありませんで

した。思う通りにできるかどうか誰が断言できるでしょうか」[24]と誰の実力なのか具体的には書かれてないが、実力不足による成功・失敗可否の不安感で許英粛に積極的に提案できなかったことを打ち明けている[25]。

以上の手紙の内容から、当時は許英粛が卒業と同時にソウルに帰国し、李光洙は肺病で治療のため沼津にて療養もした状況であったため許英粛との不確実性、周囲の結婚に対する反対と悪い噂など、複雑な問題から抜け出したい心境で逃避を考えたかも知れない。しかし、李光洙は許英粛と離れた２ヶ月の間すでに中国行きを決めており、中国行きは恋人との逃避だけではなく、自分の一生をかけた選択の意味を持ったこととして変わっている。このような変化が起きたのはやはり当時の世界情勢の変化とともに活動していた東京留学生の活躍と李光洙との関係が考えられ、この選択の成功可否は自分も含めた実力ともつながっていることとして、成功可否による不安感があったため積極的に提案できなかったことが、内外の窮迫な状況と相俟って許英粛も一緒に行くこととなったと推定できる[26]。

３．なぜ東京へ帰ったのか

李光洙は1918年10月16日に東京を出発し、11月８日に北京に着くが、許英粛との逃避生活は長く続かなかった。許英粛が北京で山本病院で勤務をしたこと、許英粛が母から２回にわたって送金をもらったこと、家まで借りて生活したことを考えると、李光洙と許英粛が相談しながら決めたとしても、李光洙は許英粛に自分の事情をどこまで話し、許英粛はどこまで知っていたのか疑問が生ずる部分である。

李光洙は約２ヶ月間の北京生活を終え、許英粛を北京に置いたまま１人で急遽東京に帰国するが、東京からまた上海へ亡命することとなり、上海で許英粛に最初に送った手紙には次のようなことを書いている。

> 私を怨むでしょう。仕方がない奴だと考えたに違いありません。しかし、もうすぐ私の事情が（やむを得ない）分かれば許してくれると信じます[27]。（下線は筆者）

許英粛を北京に残したまま自分だけ東京に帰国した李光洙は罪意識と責任感による苦しみを含めた許しの手紙ではなく、自分が置かれている状況が分かれば理解してくれるという了解を求め

る手紙を送った。この手紙から李光洙は初めて許英粛にも話せなかったやむを得ない状況によって北京へ行き、急遽帰国することとなったことを打ち明けている。

では、なぜ李光洙は許英粛に自分の事情を話せなかっただろうか。その事情は何であったのか。２章で確認したように、李光洙は第２次東京留学時代に築いた親友関係と「学友会」、「朝鮮学会」などの活動から世界情勢の情報交換と、今後の独立運動に対する協議による計画によって北京に行くこととなり、北京でも密会で決められた計画を実行するために急遽東京に帰ることとなったことが推定できた。

北京行きが単純に許英粛との愛情の逃避だけではなかったことは、李光洙が一人でソウルに帰国した後の行跡からも推定できる。

> 戊午年1918年11月11日、欧州大戦の休戦条約が成立したという便りを私が新聞で見たのは北京であった。ウィルソンの14原則が発表され、パリで平和会議が開かれることとなって中国代表陸徵祥さんがパリに向かってパリに出発した。
> このようなニュースは私の心を揺らした。私はすぐ荷造りをしてソウルに来て清進洞のある旅館で中央学校に電話をかけ玄相允に頼んでこの機会に独立運動を起こす議論をした。私が特に玄相允にこの話をした理由には彼が私が信じる友人であること以外にもう一つの重要な理由があったが、それは玄相允が崔麟と師弟の義があって親しい関係であることが分かったからである。私は海外の情報をもっとよく聞ける北京で得た情報を彼に伝え彼が崔麟を動かし、崔麟を通じて天道教の孫秉熙道主を動かして天道教を主体に独立運動を動かそうとすることであった[28]。（下線は筆者）

李光洙は解放後に書いた自伝小説「私の告白」の中で「己未年と私」という回顧録のような文で北京から帰国した後の行跡について上記のように述懐している。すなわち、李光洙は北京から帰ってすぐ一糸乱れぬ行動をするが、北京で２ヶ月間逃避生活をしていた個人ができる行動とは思えない推進力を見せる。ソウルで用務が終わった後はすぐ東京に行き、東京では「朝鮮青年独立団」に入り、『２・８独立宣言書』と日本議会に送る『請援書』を執筆するなど、世界情勢の変化とともに積極的に活動していた。

> 宣言書を日本の絹に書き写し、学校制服の上着の背中の裏に貼って宋繼白を本国（朝鮮－筆者注）へ行かせた（彼ももう亡くなった方だ）。東京では２月８日を期して留学生が集まって独立宣言をするのでソウルでも応じて宣言することを要請することであった。内外で一緒にすることが力になるためであった。私は宋繼白にソウルに行って中央学校の玄相允を訪れるように言った。宋繼白はすぐ発った。（中

> 略）この人も東京宣言書の署名人の中の１人だったが、その他に白寛洙、金度演、徐椿、金喆壽、崔謹愚、金商徳などは崔八鎔が連絡した[29]。（下線は筆者）

上記のように、李光洙は東京に行っても「朝鮮青年独立団」の同志だった宋繼白に自分がソウルに帰った時に会った玄相允と会うように指示し、「新亜同盟党」の党員であった崔八鎔と協議しながら推進していたことが分かる[30]。

すなわち、李光洙が逃避生活中、北京から急遽帰国したにもかかわらずこのように「海外の情報をもっとよく聞ける北京で得た情報」を[31]「新韓青年党」の党員に伝え、「内外で一緒にすることが力になるため」[32]という戦略の基で朝鮮とも連絡を取りながら『２・８独立宣言書』を執筆し、東京とともに朝鮮でも「３・１運動」が同時に行われるように動いたことは、ソウル・東京・北京・上海との緊密な連携があったから成し遂げられたこととして、李光洙が許英粛にも話せなかったやむを得ない事情が何であったのか推定でき、北京へ行くことに変更し、また急遽帰国することとなったことを打ち明けられなかった李光洙の心境も窺えることができる。

４．なぜ上海へ亡命したのか

東京で『２・８独立宣言書』を作成した後、上海へ行くことになった経緯について李光洙は次のように覚えている。

> 全ての準備を終えて今は２月８日がくることだけを待っていたある日、崔八鎔が私の下宿に来て私に上海に行くよう勧めた。これは自分の個人の意思ではなく、同志一同の意思であることを付け加えて言い、お金をいくらか（二百何十ウォンだったのか確かではない）を出してくれた[33]。（下線は筆者）

ここで言った同志一同は誰を指しているだろうか。２章で確認したように崔八鎔は李光洙と同じ早稲田大学生として、「日本支部在日新亜同盟党」の盟員だけではなく、「朝鮮青年独立団」と「新韓青年党」でも活動をした同志である[34]。すなわち、李光洙に同志一同の意思として伝えたことは李光洙も同志であったことを表し、 同じ組織と団体で活動をしていたため個人ではなく、組織の命令として李光洙に上海への亡命を指示することができたと思われる。

では、崔八鎔は同志としてどのようなことを指示しただろうか。上海への亡命指示を受けてす

ぐ上海へ行き、上海へ着いた際のことについて李光洙は次のように述懐している。

> 二月三日朝ついに目的した上海に着いた。上海では着いてすぐ張徳洙君の宿所を訪れた。
> 張君は大勢を見ると、自分は必ず朝鮮内地に帰らなければならないので、旅費が残っていたら自分の旅費として出してくれと頼んだ。（中略）その後私は趙東祜と一緒に同じ家、同じ部屋、同じベッドの中で寝た[35]。（下線は筆者）

> 私が上海に着いたのは己未年一月末であった。私はいったい上海で誰を探せばいいのか知らなかった。四年前に上海にいた人の中で誰が残っているのか知らないし、またどこを行けば彼らを見つけるのか知らなかった。それこそ南大門入納ではなく、上海入納のように来たことだった。ところが、幸いに埠頭で張徳洙と会った。『どうしたの？』『あ、春園こそどうしたの？』と私達はお互いに驚いた。私はこのようなことで日本から来るところだと言うと、そのような運動を起こすために東京に行くところだと言い、（中略）張徳洙を見送りするために来た人がいたが、それは趙東祜だった。張は私に趙東祜について行くように言ってから船に乗って行ってしまった[36]。（下線は筆者）

上海へ着いた際の状況について李光洙は少し異なる記憶をしている。1932年に書いた「上海の二年間」では「上海では着いてすぐ張徳洙君の宿所を訪れた」と書いている。すなわち、上海へ出発する前にすでに上海で誰と会い、どこで泊まるのかが決まっていて、そこはまさに「新韓青年党」の張徳洙が過ごした宿所として、同志趙東祜と一緒に合宿することと決められていたといえる。

一方、解放後に書いた「私の告白」では誰に会いに行けばいいのか分からない状況で偶然に張徳洙と会い、張徳洙を見送りに来た趙東祜と一緒に過ごすこととなったと、全てのことが偶然に決められたように書かれている。しかし、２つの文が書かれていた時期と上海を出発する前の李光洙の行跡を総合的に判断すると、上海へ出発する前にすでに上海での計画が決められていたと判断するのが妥当であろう。

これを証明してくれる資料として、東京を出発して神戸で上海へ行く船に乗り換える際に警察は李光洙に渡航の理由について尋ねるが、李光洙は上記の２つの文で同じく「順天時報」の記者として行くと答えているが、「上海の二年間」ではもっと詳しく「東京国民新聞記者の紹介を持って北京の順天時報という日人経営の新聞社で英語が上手な記者を採用するということでそれに応募するために行く」[37]と詳しく記録するかのように書いている。

さらに、実際に李光洙と許英粛が北京に逃避に行く際にも渡航目的を同じ理由で答えたことは

意味深いこととして、このような紹介状まで準備して発することができたことも含め、北京と上海行きを同じ理由で答えたことは、李光洙が北京も上海も個人の事情によって渡航したことではないと推定できる。当時北京で会った人達の中で「国民新聞社外報部記者玉生武四郎の添書を持ってこの地域の国民新聞通信員である松村太郎を訪問」し、「「順天時報」社長渡邊」と会ったという記録がある[38]。実際に北京の「順天時報」で働こうと社長と会ったのか、それともすでに北京から上海まで無事に亡命するための準備としてのアリバイ作りだったのか分からないが、上記の記録からも「上海の二年間」の内容がより事実に基づいて書いた文であると考えられ、北京も上海も徹底した計画を立ててから出発したことが分かる。

以上の行跡から、李光洙は東京で『２・８独立宣言書』を執筆し、上海へ亡命する際にも「在日新亜同盟党」と「朝鮮青年独立団」、「新韓青年党」の同志として指示を受けて亡命することとなり、上海へ到着した後も同じ党員として同志である張徳洙と会い、張徳洙が過ごした宿所で、また「新韓青年党」の同志である趙東祜と過ごし、さらに「新韓青年党」発行の『独立新報』の刊行を手伝う活動を行い、党員の同志として具体的な指示に従って活躍していたことが分かる。

では、李光洙が「在日新亜同盟党」、「朝鮮青年独立団」、「新韓青年党」の同志として具体的な指示に従って上海へ亡命したとするなら、李光洙の上海での活動もこれらの団体の運動方針に従って活動したと予測できる。

上海で亡命生活を始めた李光洙はどのような目的と使命感を持って任じていたのか。李光洙は東京で崔八鎔から受けた指示に従って独立宣言を海外メディアに知らせる任務の他、大韓民国臨時政府の発足のための任務を果たし、大韓民国臨時政府が発足された際には外務委員としても任命されたがすぐ辞退し、臨時史料編纂会の主任と独立新聞社の社長兼主筆としての任務を担うなど、膨大な任務を遂行した。独立宣言を海外メディアに知らせるため突然上海に行くことになった経緯から考えると、上海で任された任務は使命感と責任感を感じるほど重大な任務であったといえる。

李光洙は「３・１独立宣言書」を英語に訳し、新聞記事も作成して上海発行英字新聞、中国新聞、聯合通信（AP）に提供した。そして、英文「３・１独立宣言書」をアメリカ・イギリス・フランスの元首の宛てに送った[39]。その際の感激を李光洙は「この日呂運弘と私は本当に肩をそびやかしてノルウェー人が経営している無線電信局へ行った。アメリカ、ハワイの国民会へ送る電報とともに７百何十ウォンの電報料金を払って電信局から出た時は本当に違う世界のようであった」[40]と述懐している。３・１独立運動の記事は３月４日の朝刊聯合通信（AP）に報道され[41]、上海に来る時に任命された海外メディアに知らせる任務を充実に果たし、短い時間ではあったが、

李光洙が上海に来た甲斐や感動を最も感じた時期ではなかったのかと思われる。

李光洙が許英粛に送った手紙からも上海でどのような日々を過ごしているのかが窺える。李光洙が許英粛に上海から送った最初の手紙では、「最近は英語だけを読んだり、話したり、書いたりしています。相当進歩しているような気がします。英語で百頁ほどの著述をしています」[42]と、上海での英語による任務として読むことだけではなく、執筆までしていることが分かり、海外メディアに朝鮮の実情を知らせる任務を果たすために毎日英語を用いた作業をしていたことが分かる。

李光洙が『独立新聞』の社長と主筆を担うことになったのは、彼が米国の『新韓民報』の主筆の職を勧められていたことや、米国に行く前に朝鮮語雑誌『大韓人正教報』[43]の主筆を務め、上海に亡命した直後は「新韓青年党」の党員と交流し、彼らの勧誘で『独立新報』の刊行を手伝った[44]経歴があったからであろう。李光洙は『独立新聞』の社長兼主筆・編集者として、1919年８月21日の創刊号から1921年４月２日まで多くの社説や論説を書いたが[45]、 彼は以前から啓蒙主義者・教育者・志士として多くの論説を書いたため、その経験と思想が『独立新聞』の論説にも大きな影響を及ぼしたと思われる。

李光洙が書いたと推定される『独立新聞』の「創刊辞」には、「このような五大使命を背負って本報が創刊された。能力があってこのようになったのではなく、やむを得ずこのようになった。すでに責任を持って出たため、真心と力を尽くして奮闘をしようと、果たして匹馬単騎で万里征途に登った感じがある」[46]と書かれている。この「創刊辞」からは、李光洙は自分が『独立新聞』の社長と主筆を担うことになったことに対してやむを得ない状況に置かれ、過重な任務を任されていたという心境と状況が読み取れる。それは、海外メディアに宣伝するほどの任務ではなく、『独立新聞』の社長兼主筆になったことからの重要さによる責任感と使命感からであると思われる。

では、李光洙は『独立新聞』に何が書きたかっただろうか。そして、その内容は李光洙が北京から上海までの一連の独立運動とどのような関係を持ち、どのような関連性が読み取られるだろうか。

『独立新聞』の「創刊辞」に「文明人の生活に言論機関の必要は再度言うまでもないが、挙国一致で光復の大事業を経営するこの際に臨んでもっと緊要さを悟らせる」と書かれていることからも、李光洙が『独立新聞』の社長兼主筆という任務に対してどのように考えていたのかが窺える。さらに、「創刊辞」には、「民族思想の鼓吹と民心の統一」、「我らの事情と思想を我らの口で伝えること」、「世論を喚起させること」、「新思想を紹介すること」、「改造或いは復活し

た新国民を作ること」と、５つの使命が書かれている。「我らの事情と思想を我らの口で伝えること」と「世論を喚起させること」の使命は、『独立新聞』の社長兼主筆という任務を想起させる使命として、李光洙が多くの論説を『大韓興学報』や『少年』、『学之光』、『大韓人正教報』、『青春』、『毎日申報』、『開闢』などに載せた経歴から学んだ言論機関の重要さから悟ったこと、上記にも言及した「文明人の生活に言論機関の必要は再度言うまでもないが、挙国一致で光復の大事業を経営するこの際に臨んでもっと緊要さを悟らせる」という趣旨から掲げた使命であるといえる。

特に「創刊辞」に「国士と国民性を鼓吹し、一緒に新思想を摂取して改造或いは復活した民族として復活した新国民を作ろうと努力することが本報の使命だ」と主張しながら創刊号に「宣伝改造」[47]という論説を載せたことは意味深いことである。

「亡国の民族が興国の民族になろうとするなら改造しなければならない」[48]、「新国民の新生活をはっきりと経営できる資格と能力があるように、民族そのものの改造を決行するべきだ」[49]という使命感で李光洙は、「国民」としての「資格」と「能力」を育成するための「改造論」を書いた。1919年８月21日創刊号から10月28日まで18回にわたって連載された「宣伝改造」の内容は、「実」、「信」、「十年生聚十年教訓」、「遠慮」、「団合」に分けて述べられている[50]。「宣伝改造」は、内側では朝鮮民族を、外側では列国を意識しながら過去10年間「国民」として責任と任務を果たせなかった愛国志士に対する批判と同時に、今後10年を目標とし、「国民」としての資格と能力が持てるように「改造」するという「宣伝」の論説である。

このように李光洙が『独立新聞』の「創刊辞」だけではなく、論説「改造論」を創刊号に書いた背景としては、第１次世界大戦の終戦による弱小民族の独立の雰囲気高潮と、1918年ウィルソンの「民族自決主義」の発表による「世界改造」の流れに便乗するためとして、世界に朝鮮の独立運動の現況を知らせ、米国と日本に独立の認定を欲求する目的として書かれたといえる。

李光洙は第１次世界大戦の終戦とウィルソンの「民族自決主義」の発表を北京で聞いたと述懐したが、当時中国の『北京日報』では次のような記事を書いていた。

> 彼ら朝鮮青年達は公式代表をヨーロッパに派遣し、支持を要請しようとする必死の努力をしているが、彼らの努力が水の泡になるということが一般的な観測である[51]。（下線は筆者）

すなわち、当時のウィルソンの「民族自決主義」が弱小民族の独立の雰囲気高潮に大きな影響

を及ぼしたのは確かだが、当時の「学友会」や「新韓青年党」の人達は定期的に集まって世界思潮の流れを討論しながら情報を共有し、さらに、北京と上海を拠点に独立運動の方法を苦心した「新韓青年党」の環境と活動を考えると、この情勢を楽観的に観望した人は少なかったと思われる。このような判断によって1918年11月28日呂運亨が張徳洙と一緒に「新韓青年党」の名で書いてウィルソンの特使であるクレインに渡した陳情書と、それと殆ど同じ内容で1919年１月25日に申圭植と金奎植がパリ講和会議でウィルソン大統領に提出しようと書いた請援書には次のような言葉で書かれていた。

> ベルサイユ平和会議に国家が結集し恒久的な世界平和を樹立し、協力しようとするこの際、朝鮮人は閣下に我々の要求を考慮して下さることを要請いたします。（中略）朝鮮民族は大統領閣下に進んで彼らの不幸な運命を考慮して下さることを要請いたします。どうか平和会議が我らの代表とお会いして下さり、自由意思に反して日本の属国になった朝鮮の状況を明確に聴取して下さることをお願い申し上げます[52]。（下線は筆者）

上記のように、積極的で強い意志の表現ではなく、「要請」や「聴取して下さる」のような消極的で優しい言葉による請援書として、「朝鮮が独立をするべき正当性や必要性など明確で強力な声で表明していない。朝鮮の実情を訴えるために代表がパリ講和会議に派遣されたのでどうかお会いして事情を聴取して下さることを要請」[53]しているのみである。金奎植が「新韓青年党」の代表としてパリに行っての活動計画が３段階に分けて構成されていたが、１年間滞在しながら広報局を設立して、１番目世界の後援・同情の獲得、２番目広報活動、３番目備忘録提出[54]という計画から、朝鮮の実情を宣伝し、世界の後援を得ることが目標として、今度の「独立の好機」に独立を成功するという目標よりは、今後好機がきた際に必ず独立ができるための準備として活躍したと判断できる。

李光洙が書いた『２・８独立宣言書』も最後に「我が民族は日本をはじめとした世界各国が我が民族に民族自決の機会を付与することを要求し」と書かれており、日本議会に提出するために同時に書いた『民族大会召集請援書』も朝鮮民族大会の召集を要求するために書かれた請援書として、当時の独立運動の目標と戦略が読み取られる。

李光洙は上海に着いてから「新韓青年党」創党の中心人物だった趙東祜と同じ宿所で過ごすこととなるが、「新韓青年党」の創党目的が書かれている「新韓青年党趣旨書」にも次のような趣旨が書かれている。

> 大韓の青年よ、独立完成が我々の目的の全体とは言わないでくれ。これはただ我々の事業の初めとして、我らには独立以上にもっと重要な事業がある。何なのか。同じ民族の改造と実力の養成だ[55]。（下線は筆者）

以上の独立運動の方針から、李光洙が上海において『独立新聞』の「創刊辞」だけではなく、創刊号に「宣伝」をつけて「改造」を強調しながら繰り返して述べた理由が窺える。この際に「宣伝」の意味も重要な意味を持つが『独立新聞』の「創刊辞」で「我々の事情と思想を我らの口で説すること」と述べたように、「宣伝」は独立のための重要な戦略として「この全ての事業を一貫する根本的な事業は宣伝であり、国民を統一することも根本は宣伝にあり、外国の援助を得ることも根本は宣伝にあり、義勇兵を募集したり、公債、国債を募集することも根本は宣伝にある」[56]と、独立運動の際に宣伝の重要さを様々な分野を例に挙げながら述べ、「我らのように初創期において内では国民の統一が不安全で、外では列国の信任が薄弱な臨時政府が、このような大事業を経営する際に、果たして宣伝に全力を尽くさずに可能だろうか」[57]と、「宣伝」が独立運動にどれほど重要なのかを力説していた。「宣伝改造」は、このような「宣伝」の重要さから『２・８独立宣言書』と日本議会提出用の「民族大会召集請願書」と同様に、愛国志士に向けて、民族性復活と、近い内に起こす独立のための具体的な準備論として、改造を呼び起こすための宣伝として書かれたものであるといえる。

李光洙は「宣伝改造」で述べた通りに自らも実践しようとしたが、許英粛に送った手紙にも朝鮮民族の「改造」に対する可能性と必要性を重視し、本人自身も「改造」していこうとする努力をしていると書いた。「上海にて」1920年１月に推定される手紙で李光洙は「私は精神的に大きく変化し、非常に着実で穏健な者になったと思います。そして、一生人格の修養に尽力する者になります。私は早く英と会って英も私のように変わることを願います」[58]と自ら修養することによって改造され、許英粛も自分と同じく改造できることを期待していることが分かる。「私は英粛が同胞に献身する貧しい儒者を愛し、助けてあげる妻になってくれることを願います」[59]という願いは許英粛を「国民」としての資格と能力を備えることを願うこととして、「私はいつまでも全力を尽くしても、私の人格と生活を根底から改造し、英粛が信じ、同胞が信じ、天が信じる人に絶対になります」[60]と皆に信用できる人に改造することを誓う覚悟を見せている。

以上で、李光洙は上海に来てからも膨大な任務を遂行したが、『独立新聞』の「創刊辞」と創刊号に載せた「宣伝改造」、「新韓青年党趣旨書」を通じて「世界改造」の流れに合わせて「改

造」と「宣伝」を強調しながら「独立の好機」を活かすための任務に全力を尽くしたといえる。朝鮮民族は独立できる資格と能力を備えた民族であることを内外に宣伝し、これを基に国民として改造していこうとする意志を自ら実践しながら全力を尽くしていたが、このような独立運動の方針は李光洙が繰り返して主張してきた「準備論」[61]ともつながるといえる。

5．まとめ

今まで李光洙と許英粛の北京への逃避、東京への入国、上海への亡命は急遽行われていたこととして、当時の状況が非常に緊迫に変化していたためとして認識されたが、その中で李光洙の上海からの急遽帰国についてはまだ多くの疑問が残っている。

李光洙の第２次東京留学時代の行跡と許英粛と交わした手紙を通じて李光洙はすでに中国行きを決めており、この中国行きは李光洙が東京で活動していた「学友会」、「朝鮮学会」などの活動とも関連性があり、ただ逃避旅行のみならず、自分の人生をかけた中国行きであったことが分かった。そのため、北京からソウルに帰国した後の行跡、東京で担った『２・８独立宣言書』執筆と「３・１独立運動」の準備、上海への亡命が李光洙個人の判断によることではなく、第２次東京留学時代から築いてきた信頼と活動が第１次世界大戦の終戦がもたらした「独立の好機」という希望と相俟って「新亜同盟党」、「朝鮮青年独立団」、「新韓青年党」の計画と指示による活躍であったことが確認できた。

このような行跡の一連として、李光洙は上海でも「新韓青年党」の党員と行動をともにし、「新韓青年党」発行の『独立新報』の刊行を手伝い、「新韓青年党趣旨書」、『独立新聞』の「創刊辞」、『独立新聞』の創刊号に載せた「宣伝改造」で「改造論」・「宣伝の重要性」を力説したことは、「世界改造」の情勢に合わせた当時李光洙が選択した独立運動の方法として、李光洙が続けて主張してきた「準備論」ともつながるといえる。

注

1．当時李光洙は恋愛中だった許英粛と北京に愛情逃避中だった。李光洙と許英粛が考えていた北京への逃避がどのように実行されたのかについては、『春園愛情書翰実録集－愛する英粛へ』文宣

社，1955の「東京にて」第十四信に書かれている。しかし、この手紙が『李光洙全集』18 三中堂，1962には収録されていない点は興味深いこととして、この内容については、拙稿「李光洙の書翰集『春園愛情書翰実録集－愛する英粛へ』について」『近代書誌』11 ソミョン出版，2015（「이광수의 서한집『春園愛情書翰實錄集－사랑하는 英粛에게』에 대하여」『近代書誌』11 소명출판，2015）を参照されたい。李光洙の書翰集は1955年許英粛の労苦で文宣社で『春園愛情書翰実録集－愛する英粛へ』で単行本として出版された。その後、８年後である1963年に三中堂の『李光洙全集』18「愛する英粛へ」に再集録され、新しく収集された手紙が補完された。以下、李光洙の作品については、主に三中堂の全集から引用し、初出の雑誌や新聞から引用する場合はその点を記す。「愛する英粛へ」『李光洙全集』18 三中堂，1962，『春園愛情書翰実録集－愛する英粛へ』文宣社，1955より引用する。

2．この他にも上海時代について言及した文としては、解放後の1947年に書いた伝記『島山安昌浩』（大成文化社）『李光洙全集』13 三中堂，1963がある。自分の自伝的な内容を繰り返して書く傾向と多作の作家であることを考えると、上海時代について書いた文が少ないということは異例のことであるといえる。

3．代表的には、鄭晋錫『言論人春園李光洙』キパラン，2017，鄭秉峻「中国管内新韓青年党と３・１運動」『韓国独立運動史研究』65 独立運動史研究所，2019，崔起榮「李光洙の民族運動－上海，1919－1921」『己未年独立運動と民族運動』春園研究学会己未年独立運動100周年記念国際学術大会資料集』，2019，李侑珍「李光洙と上海－『独立新聞』を中心に」『己未年独立運動と民族運動』春園研究学会己未年独立運動100周年記念国際学術大会資料集』，2019，チョン・ホンソップ「春園李光洙の上海亡命背景」『春園研究学報』15 春園研究学会，2019，崔珠瀚「２編の官憲資料「要視察朝鮮人李光洙に関する件」（1919）について」『民族文学史研究』71号 民族文学史学会，2019などがある。

4．ユン・ソヨンも当時の回顧録が「自分を主導者として設定する方式は２・８独立運動参加者の共通点だ。これは当事者がお互いに業績を争うということより、当時独立運動を起こそうとする考えは誰ということなく自然に湧き出た行動だったため、このような自己中心的な回顧をしていると思われる」と述べている。ユン・ソヨン「日帝の「要視察」監視網の中の在日韓人留学生の28独立運動」『韓国民族運動史研究』97 韓国民族運動史学会，2018，pp.59-60.

5．鄭晋錫と鄭秉峻は、李光洙の北京から上海までの活動は新韓青年党との連帯活動によることだったと述べ（『言論人春園李光洙』キパラン，2017、「中国管内新韓青年党と３・１運動」『韓国独立運動し研究』65 独立運動史研究所，2019）、チョン・ホンソップは、李光洙の北京行きは愛情逃避だったが、北京での滞在中新韓青年党と連携されたと述べている（「春園李光洙の上海亡命背景」『春園研究学報』15 春園研究学会，2019）。

6．崔珠瀚「２編の官憲資料「要視察朝鮮人李光洙に関する件」（1919）について」『民族文学史研究』71号 民族文学史学会，2019.

7．李光洙「愛する英粛へ」（東京にて1918年７月23日）『李光洙全集』18 三中堂，1963，p.445.

8．李光洙「愛する英粛へ」（東京にて1918年９月４日）『李光洙全集』18 三中堂，1963，p.455.

9．李光洙「愛する英粛へ」（東京にて1918年10月２日）『李光洙全集』18 三中堂，1963，p.461.この手紙は『春園愛情書簡実録集－愛する英粛へ』文宣社，1955には収録されていない。

10. 李光洙「愛する英粛へ」（東京にて1918年10月13日）『李光洙全集』18 三中堂，1963，p.462.この手紙は『春園愛情書簡実録集－愛する英粛へ』文宣社，1955には収録されていない。

11. 「東京にて」第十四信が『李光洙全集』18 三中堂，1962に収録されていない点は興味深いこととして、単純に抜けたというより意図的な除外ではないかと思われる。李光洙『春園愛情書簡実録集－愛する英粛へ』文宣社，1955.

12. 許英粛「春園病床訪問記」『文芸公論』創刊号文芸公論社，1929，pp.62－63，p.635.

13. 姜徳相『呂運亨評伝１－中国・日本で開いた独立運動』歴史批評社，2007，pp.120-161参照。

14. イ・キョンナム『雪山張徳洙』東亜日報社，1981，p.94，イ・マンギュ『呂運亨先生闘争史』民主文化社，1946，p.20，姜徳相『呂運亨評伝１－中国・日本で開いた独立運動』歴史批評社，2007，p.142，p.144より再引用。

15. 姜徳相『呂運亨評伝１－中国・日本で開いた独立運動』歴史批評社，2007，pp.143-160参照。

16. 機密第28号在支那特別全権公使小幡西吉送る，外務大臣殿，「要視察朝鮮人李光洙二関スル件」，1919年２月18日，前掲書，p.152より再引用。

17. 前掲書。

18. イ・キョンナム『雪山張徳洙』東亜日報社，1981，呂運弘『夢陽呂運亨』青廈閣，1981，姜徳相『呂運亨評伝１－中国・日本で開いた独立運動』歴史批評社，2007参照。

19. 鄭秉峻「1919，パリへ行く金奎植」『韓国独立運動史研究』60 独立運動史研究所，2017，pp.81－84.

20. イ・キヒョン『夢陽呂運亨評伝』実践文学社，1984，p.29.

21. 李光洙「愛する英粛へ」（東京にて1918年10月13日）『李光洙全集』18 三中堂，1963，p.462.この手紙は『春園愛情書簡実録集－愛する英粛へ』文宣社，1955には収録されていない。

22. 前掲書。

23. 李光洙「愛する英粛へ」（東京にて1918年10月２日）『李光洙全集』18 三中堂，1963，p.461.この手紙は『春園愛情書簡実録集－愛する英粛へ』文宣社，1955には収録されていない。

24. 前掲書。

25. 許英粛の家での結婚反対理由が既婚者であること、健康問題、女子問題などのためであることは手紙を通じて知っているが、やはり既婚者であることが最も大きな問題になったことは自明のことである。李光洙が許英粛の母に送った手紙の内容から見ると、李光洙の離婚の理由について許英粛の母は許英粛のためだと誤解していることが分かる。これに対して李光洙は自分の離婚が許英粛とは何の関係もなく、許英粛と付き合う前から考えていたことを繰り返して説明している。

すなわち、李光洙が積極的に誘うことができない理由が10月２日の手紙だけ異なることが分かる。

26. 李光洙の中国行きについて『新韓青年』には「中国の中興は必ず日本を挫折させるはじまり」という認識を持って「満州地方を視察する無銭旅行をする」と言いながら1918年10月16日に東京を出発したと書かれている。この旅行は段々高揚していた独立意思を中国にいる同志に伝えようとする旅行であったと評価されているが、実際許英粛と北京に逃避した時期と同じだが、より正確な資料の確認が要求される。なぜなら、李光洙は『私の告白』で五山学校をやめてシベリアを放浪したことについて「私は中国をはじめベトナム・インド・ペルシャ・エジプト、このように衰亡した或いは衰亡しようとする民族の国を廻ってみようとすることを私の旅行の目的として考えたことだ。私はそこで衰亡している民族の情景も見て、また彼らがどのように独立を図るのか見たかった。その中から私がすすめる道が見つかると思った。私は歩いて大陸を横断する予定だった」と書いているからだ。内容から見て李光洙が錯覚してシベリア放浪旅行を『新韓青年』に書いたか、それとも「私の告白」で時期を錯覚して書いたのか確認が必要だ。李光洙「中国之必挫曰而始」『新韓青年』創刊号新韓青年党，1955，p.73，姜徳相『呂運亨評伝１－中国・日本で開いた独立運動』歴史批評社，2007，pp.149-150より再引用，李光洙「私の告白」『李光洙全集』13 三中堂，1963，p.208.

27. 李光洙「愛する英粛へ」（上海にて1919年２月12日）『李光洙全集』18 三中堂，1963，pp.466-467. この手紙は『春園愛情書簡実録集－愛する英粛へ』文宣社，1955には収録されていない。

28. 李光洙「私の告白」『李光洙全集』13 三中堂，1962，p.228.

29. 前掲書，p.229.

30. 田栄沢、崔麟、宋繼白、徐椿は当時のことを大体同じく記憶している。ソン・チイェ「近代韓国の「民族自決」受容と２・８独立運動」ソウル大大学院修士学位論文，2011，pp.143－160参照。

31. 李光洙「私の告白」『李光洙全集』13 三中堂，1962，p.228.

32. 前掲書，p.229.

33. 前掲書，p.230.

34. 李光洙は「私の告白」で崔八鎔についてソウルで玄相允と会った後、すぐ東京に行き、一緒に働ける人を選んでいる時に自分が選択した人だと述懐している。崔八鎔と居酒屋で酔言を交わしている中、私達の考えが一致することが分かって私が基礎した独立宣言書と日本議会に提出する文書とそれを印刷する費用300ウォンを崔八鎔に渡したと書いている。李光洙は崔八鎔を自分が選択した人だと覚えているが、同じく「新韓青年党」の党員として長い期間一緒に活動した関係からもう互いに信用しながら宣言書と資金を渡す同志であったからこそできたことだとみるのが妥当であると思われる。李光洙「私の告白」『李光洙全集』13 三中堂，1962，p.228.

35. 李光洙「上海の二年間」『三千里』新刊号，1932，p.29.

36. 李光洙「私の告白」『李光洙全集』13 三中堂，1962，p.230.

37. 李光洙「上海の二年間」『三千里』新刊号，1932，p.29.

38. 北警秘発第１号，1919年１月30日，警部波多野龜太郎報告，姜徳相『呂運亨評伝１－中国・日本で開いた独立運動』歴史批評社，2007，p.150，p.152より再引用。

39. 李光洙「私の告白」『李光洙全集』13 三中堂，1962，p.233.

40. 前掲書，p.233.

41. 金願模『ヨンマルの雲－春園李光洙の親日と民族保存論』壇国大学出版部，2009，p.86.

42. 李光洙「愛する英粛へ」（上海にて1919年２月12日）『李光洙全集』18 三中堂，1963，p.466.

43. 『大韓人正教報』は、大韓人国民會のシベリア地方総会の機関誌として、安昌浩を中心とする米国の国民会の総会から派遣された李剛の責任のもとで発行された朝鮮語雑誌である。崔起榮『植民地期民族知性と文化運動』ハヌルアカデミー，2003，pp.157-161.

44. 李ハヌル「上海版『独立新聞』の発刊主体と性格」成均館大学史學科修士学位論文，2008，p.8.

45. 『独立新聞』103号，1921年４月21日付には「李光洙君は数月前に辞任したので読者諸彦は照亮することを望む」という社告が書かれている。

46. 『独立新聞』創刊号，1919.8.21.

47. 長白山人「宣伝改造」『独立新聞』創刊号，1919.8.21－1919.10.28. 「長白山人」は、安昌浩が李光洙につけ雅号である。「雅号の由来（二）」『三千里』1930，５月号（「雅号의 由来（二）」『三千里』1930，５月号），p.76.

48. 前掲書，1919.8.21.

49. 前掲書，1919.8.21.

50. 具体的な内容としては、「実」を改造の中枢であり、出発点として決め、団結・大事を成すためにも「実」が重要で、民心を統一し、激励するにもひたすら「実」であることを力説している。「信」は、一度愛国者として許し、独立運動の同志として許した後には独立の目的が完成するか、死ぬまで愛国者として、独立運動の同志である者が「信」の人だと説明し、背信の例として伊藤博文・李完用・宋秉畯・尹德榮など、国を裏切った国民、王を裏切った賊臣・民族の独立運動を妨害する走狗、同志を裏切った愛国者を挙げている。「十年生聚十年教訓」では、ただ悲憤の涙を流しながら時期が来ることを待っている志士を批判し、現在の責任を過去10年間の先輩志士に負わせている。「遠慮」では、統一した愛国心を主張し、団結できなかった過去10年を「近慮」だと批判し、「団合」では、先輩志士が絶叫した「団合」を言及しながら、３・１運動の大団合を高く評価し、組織の構成と活用を述べている。

51. 「Koreans Starting Lndependencd Movement,」『Extract from the Peking Daily News』，Dec.10th，1918. 鄭秉峻「1919，パリへ行く金奎植」『韓国独立運動史研究』60，独立運動史研究所，2017，p.87から再引用。

52. 前掲書，pp.106-107.

53. 前掲書，p.108.

54. 前掲書，pp.99-103.

55. 黄・ミョヒ「新韓青年党と榴亭趙東祜」榴亭趙東祜先生ブログ，2020.11.27.

56.「李東輝総理の施政方針演説」『独立新聞』，1920.3.6.この論説では、李東輝の演説への李光洙の批判が述べられている。具体的には、施政方針に「宣伝」の条項か欠落している李東輝の方針を批判している。

57. 前掲書，1920.3.6.

58. 李光洙「愛する英粛へ」（上海にて1919年１月推定）『李光洙全集』18 三中堂，1963，p.469.

59. 前掲書，（上海にて1919年１月推定），p.469.

60. 前掲書，（上海にて1919年６月19日），p.475.

61. 李光洙は1914年３月早い時期から『権業新聞』に「独立準備しろ」という論説を書いた。『権業新聞』はウラジオストク中心の韓人団体の権業会の機関誌として「国権回復と民族主義昂揚」を発刊の目的としている。崔起榮『植民地期民族知性と文化運動』ハヌルアカデミー，2003，pp.154-157.

参考文献

基本資料

『李光洙全集』（全20）三中堂，19621963.

李光洙『春園愛情書簡実録集－愛する英粛へ』文宣社，1955.

『毎日申報』・『独立新聞』・『学之光』・『文芸公論』

イ・キョンナム『雪山張徳洙』東亜日報社，1981.

イ・キヒョン『夢陽呂運亨評伝』実践文学社，1984.

金允植『李光洙とその時代』ソル出版社，1999.

朴・ウンギョン「春園李光洙の「民族改造論」と1920年代植民地朝鮮」西江大大学院修士学位論文，2003.

崔起榮『植民地期民族知性と文化運動』ハヌルアカデミー，2003.

姜徳相『呂運亨評伝１－中国・日本で開いた独立運動』歴史批評社，2007.

李ハヌル「上海版『独立新聞』の発刊主体と性格」成均館大学史學科修士学位論文，2008.

金源模編訳『春園の光復論：独立新聞』壇国大学出版部，2009.

金願模『ヨンマルの雲－春園李光洙の親日と民族保存論』壇国大学出版部，2009.

ソン・チイェ「近代韓国の「民族自決」受容と２・８独立運動」ソウル大大学院修士学位論文，2011.

鄭秉峻「1919，パリへ行く金奎植」『韓国独立運動史研究』60 独立運動史研究所，2017.

鄭晋錫『言論人春園李光洙』キパラン，2017.

ユン・ソヨン「日帝の「要視察」監視網の中の在日韓人留学生の28独立運動」『韓国民族運動史研究』97 韓国民族運動史学会，2018.

崔起榮「李光洙の民族運動－上海，1919－1921」『己未年独立運動と民族運動』春園研究学会己未年独立運動100周年記念国際学術大会資料集』，2019.

李侑珍「李光洙と上海－『独立新聞』を中心に」『己未年独立運動と民族運動』春園研究学会己未年独立運動100周年記念国際学術大会資料集』，2019.

チョン・ホンソップ「春園李光洙の上海亡命背景」『春園研究学報』15 春園研究学会，2019.

崔珠瀚「２編の官憲資料「要視察朝鮮人李光洙に関する件」（1919）について」『民族文学史研究』71号 民族文学史学会，2019.

鄭秉峻「中国管内新韓青年党と３・１運動」『韓国独立運動史研究』65 独立運動史研究所，2019.

黄・ミョヒ「新韓青年党と榴亭趙東祜」榴亭趙東祜先生ブログ，2020.11.27.